論文審査の結果の要旨

氏名　張　文薫

19 世紀末の台湾においては、先住民はそれぞれの部族語を話し、明清二王朝の時代に大陸から移民してきた漢族は大別して 閩 南語と客家（はっか）語を話しており、しかも 閩南語も客家語もさらに下位の方言に枝分かれしていた。19 世紀末の台湾人の識字率は 10 パーセント程度と推定され、口語文はいまだ存在せず、古典中国語が読み書きされていた。その言語状況は「国語」制定以前の明治初期の日本、あるいは標準語制定以前の 18 世紀から 19 世紀半ばのヨーロッパ諸国とそれほど異ならぬ状況であったことが推測できよう。ただし大きく異なるのは台湾の俗語がその後「国語」化されなかった点である。

台湾に近代国家の国語制度を持ち込んだのは、1895 年から 51 年間にわたり植民地統治を行った日本である。初期には抵抗もあったものの、1943 年末には日本語理解者は島民の 60 %近くに達した。全島規模の言語的同化を通じて台湾島民の日本人化が進行したが、それと同時に全島共通の「国語」は諸方言と血縁・地縁で構成されていた各種の小型共同体意識を越えた、台湾大の共同体意識を形成しており、それは台湾ナショナリズムの萌芽であったといえよう。

1930 年代に入ると日本語読書市場が形成され、台湾人による日本語文学も本格化して、台湾における中国の北京語文学あるいは台湾語文学普及運動を圧倒し、日本語作家の作品が続々と内地の総合誌、文芸誌の誌面を飾って高い評価を受け、台湾島内でも文芸誌が盛んに刊行され始めている。張文環（チャン・ウェンホワン、ちょうぶんかん、1909 ～ 78）はこのような台湾日本語文学を代表する作家であった。

本論文はこの張文環をめぐり進学留学による立身出世の願望と東京での左翼運動への参加と転向、帰台後の伝統台湾への回帰など彼の成長過程とその時代背景とを綿密に調査分析し、全 5 章により日本統治下台湾における張文環文学形成過程の解明を試みたものである。

第一章では東京留学生の張文環が中心的役割を果たした同人文芸誌『フォルモサ』が台湾民族運動と日本プロレタリア文化運動とを背景とし、日本および世界の文壇との同時性を有することにより台湾文芸界での権威性を獲得し、その日本語による高い創作力も相まって日本語文学の台湾文壇における主導的地位を確立した点を論じている。

第二章では張文環の実質的デビュー作であり「転向文学」でもある短篇「父の要求」（1935）を中野重治「村の家」と対比することにより、台湾知識青年が直面した左翼運動と伝統台湾との断絶問題を解明し、さらに作中で下宿の大家令嬢が弾くピアノなどを手が掛かりに、植民地青年が抱く東京の欧化文明への憧憬を分析している。

第三章では 1938 年に帰台した張文環が当時台湾における北京語大衆小説で最大のベストセラーであった阿Ｑ之弟（徐坤泉）著『可愛的仇人』を日本語に翻案した際に行った改編の分析を通じて、張による社会的自立を目指す新女性像の提示や朝鮮人との連帯の提唱を指摘し、台湾文壇の日本語化の趨勢を考察している。

第四章では長篇小説「山茶花」（1940）から「雲の中」（1944）に至る農村を舞台にした作品群を分析し、帰台後の張文環が台湾農村の伝統的価値観へと回帰していく過程を分析した。

第五章ではプロレタリア文学崩壊後の日本に出現した武田麟太郎、高見順、平林彪吾ら『人民文庫』派作家との交遊関係を手がかりに、張文環が同派の「饒舌」な説話スタイルを受容した点を考察した上で、従来「風俗小説」と曖昧に評価されてきた短篇「芸妓の家」を分析して、売春目的のための養女制度を批判する社会改革に張の執筆目的があった点を論証している。

本論文の主な成果は次の通りである。

（1）日本統治期台湾において日本語文学が北京語・台湾語文学に対し優位性を確立していく 30 年代政治・文化状況を張文環の文学活動を中心に解明した。

（2）張文環が学歴エリートを志向して東京に留学するものの左翼運動に参加して転向し、伝統的台湾農村へと回帰していくいっぽう、なおも社会的弱者への関心を失うことなく、社会改革を企図し続けた点を、その創作活動と時代背景に周到な目配りをしつつ論証して新しい張文環像を提示した。

本論文には「転向文学」としての島木健作との影響関係、「伝統価値」の分析、朝鮮人作家との交流など、さらに考察すべき課題が幾つか残されている。しかしこれまでの張文環研究がややもすれば「風俗小説」家という些か単純で曖昧な評価に終始していたのに対し、植民地台湾における日本語文学制度の確立とこれに対する張文環の受容と抵抗を立体的に解明した点を中心に顕著な成果をあげており、本審査委員会はその内容が博士（文学）論文として十分な水準に達しているとの結論を得た。